

「子ども家庭支援の心理学」と

「子どもの理解と援助」の関連について

Relevance of “Psychology of Support for Children and Families” and “Understanding and Supporting Children”

大藏 純子

Junko Okura

〈摘 要〉

本稿は「子ども家庭支援の心理学」と「子どもの理解と援助」の関連を通して、子どもへのより良い支援ができる保育者養成に向けた授業改善の試みである。保育者になるための様々な学習や実習をする中で「将来は保育に携わりたい」という意欲を、より強化したいと考える。それは、保育職には大きなやりがいや魅力がある一方で、命を預かるという責任の重さや仕事上の困難さがあり、それを乗り越えていく力強さが求められるからである。つまり、養成校には、強い意欲と高い専門性の両方をもつ保育者の養成が求められるのである。

そこで授業では、新たな学習内容を知識・技能として定着させるだけでなく、事象を多面的・多角的に見ることを通して思考力や判断力を高められるように工夫する。また、科目の関連を通して実践的な学びができるようにする。今回は演習「子どもに対するかかわりと共感的理解のあり方」をもとに、「子ども家庭支援の心理学」と「子どもの理解と援助」の2つの科目を同時に学ぶことの意義について検討する。

(キーワード) 共感的理解 傾聴 受動的・応答的なかかわり 実践的な学び

はじめに

名古屋経営短期大学（以下、本学）子ども学科に在籍する学生は、保育者になることを目指して入学してきた。将来は子どもにかかわる職に就きたいと願う学生の多くは、子どもが好きで、素直で優しい気質をもっている。これは1年時から、保育や幼児教育について学び、さらに保育実習・幼稚園実習を通して様々な経験を積んでいるからこそであろう。そのような中で、実習において保育現場の難しさや厳しさを目の当たりにし、将来の目標が揺らいでしまう学生も見受けられる。実習先の指導担当の保育者はだれでも、職に就いたばかりのころは現在よりかなり未熟であり、多くの失敗を経験し、それを乗り越えて力量を高めてきた

はずである。これは、どの職種でも言えることで学生も頭では理解している。しかしながら、挫折経験の少ない現代の学生は、苦しい状況に立たされた時に、あきらめないで頑張ろうと奮起するより先に、自分の未熟さを必要以上に痛感し、自信を喪失してしまうように思われる。「上手くできないから自分はダメだ」ではなく、「上手くできないこともあるが、夢の実現のために頑張ろう」と、状況を冷静に受け止めつつ、夢の実現に向けてあきらめないで取り組むメンタリティーを育てていく必要性を痛感している。そのために、科目の関連性を生かし、より実践的な学びを展開することで、学生の視野を広げ、事象を多面的・多角的にとらえる力を高められるのではないかと考えた。

新課程となった保育士養成課程における科目や実習の関連性についての研究は、すでにいくつか発表されている。日隈・中澤・柳生（2020）は「保育士養成課程における心理学領域科目が担うもの」⁽¹⁾で、「保育の心理学」「子ども家庭支援の心理学」「子どもの理解と援助」の関係性と、これら心理学領域科目が担うべき大学教育についてまとめている。「保育の心理学Ⅰ」「保育の心理学Ⅱ」が再編され、「保育の心理学」「子ども家庭支援の心理学」「子どもの理解と支援」が新設された。本稿では、保育の教育課程における心理学科の変遷と、新設された3教科の意義と関連性、そして心理学科の役割について検討されている。その結果、心理学は保育実践に多様な視点と深い理解をもたらす有効な手段であり、内容の体系化と、教科間の連携が保育士の専門的な能力の開発に不可欠であることを示している。

また、同じく日隈・中澤・柳生（2020）は「子育て支援・子ども家庭支援の専門性を高める学び」⁽²⁾において、現代の日本における子育て支援や子ども家庭支援の変遷から、子育て支援を保育者が担うことについて考察している。カリキュラムの再構築により、「子ども家庭支援論」、「子ども家庭支援の心理学」、「子育て支援」の科目が設置され、子育てと子どもと家族の支援に関する専門性を深めることが求められている。今日において保育者は、保育実践においてソーシャルワークの実践者であることが期待される。そのために、保育士の専門性をどのように活かし、子育て家庭の支援を担っていくかについて具体的に検討している。そして、これら3つの科目の意義と関連性と目指すべき方向性について明示している。

一方、藤井（2022）は「卒業研究作成の試み—『子ども支援の心理学』の講義・演習を通して—」⁽³⁾において、「子ども家庭支援の心理学」の授業内容と卒業研究を関連させた実践的な学びについて示している。卒業研究という能動的な学習を通して、学生の意識が変容していく様子を明らかにした。117名の学生が「子ども家庭支援の心理学」の学習内容10項目の中から1つを選択し、課題追求をした後の知識理解や関心意欲の深まりについて考察している。これは、量的研究としての試みとして1つの方向性を示していると思われる。藤井は、幼児教育に関する専門的な知識や実践力の習得と共に、卒業研究を通して培われる論理的で客観的な視点を養いながら問題解決能力を向上させることは、就職後の多様な問題に対応する力につながるとしている。この考えについては、筆者も賛同する。なぜなら、学生自らが自分の探究したいテーマについて時間をかけて調査し、まとめていくことにより主体的

な学習効果と問題解決能力の向上が期待できるからである。また、学生が各自の卒業研究に主体的かつ積極的に取り組む中で、学び続けたいという意識が向上したことについても報告されている。保育士養成過程における学習の質を高めるためには、アクティブ・ラーニングの方法を検討することは、今後さらに必要とされるが、学生の自ら学び続ける力を培う本実践は、大変力強く意義深い。

高橋・川田（2021）は、「学生の子ども理解に関する学びに影響を与える要因—幼稚園教育実習の経験との関連から—」⁽⁴⁾において、幼稚園実習を終えた学生を対象に半構造化インタビューを行い、実習経験が子ども理解に関する学びにどのような影響を与えるのかについて検討した。得られた語りは全て記録され、調査終了後には逐語録が作成された。その逐語録から、高い頻度で語られた、①実習中に力を注ぐ「焦点」となっていた事柄、②園の実習指導体制や指導内容に関する学生の捉え、③実習を通した子ども理解に関する学びの3点に着目し、実習経験のどのような側面が学生の子ども理解に関する学びに影響を与えているのかについて検討した。その結果、①実習の焦点が「子ども」におかれた者と「子ども以外」におかれた者がいること、②焦点が「子ども以外」である者よりも「子ども」である者のほうが子ども理解に関する学びが深くなること、③子ども理解に関する学びには「子ども自体への理解」と「子どもへのかかわり方の理解」があることが示された。またこれらの学びの内容の違いが起こる要因として、園の保育方針や実習指導方針と指導内容に対する学生の捉えにあることも示唆されているが、実習経験による学びの影響について科学的にとらえようとするアプローチは価値がある。

筆者は、今年度「子ども家庭支援の心理学」と「子どもの理解と援助」の講座を担当している。本学ではどちらも2学年前期に履修する科目である。「子どもの理解と援助」の最終授業時に「本講座で行った演習の中で、保育者として大切にしたいと思ったものを選んでください」と学生に振り返らせたところ「話し手に共感的理解を示す練習をしよう（傾聴）」が1位で、受講者25人中15人が選択した。子ども一人一人に応じた保育を進めるためには、共感的理解が大切であることを学生が理解し、傾聴について高い関心を持っていることが伺えた。演習では「保育者として自分はどうな働きかけができるのか」という視点に立って考察を深める様子が見られた。このように、学んだことを自分の保育実践に生かそうとする意欲を高めたり、思考を深めたりすることが大切である。そこで本稿では、実際の講義と演習、そして学生の省察をもとにしながら、「子ども家庭支援の心理学」と「子どもの理解と援助」の2つの科目を同時に学ぶことの意義について検討していく。

I. 乳幼児期の発達とその特徴

【「子ども家庭支援の心理学」名古屋経営短期大学子ども学科 2 学年 26 名を対象に、
2022 年 4 月 20 日に実施】

1. 乳児期の発達とその特徴

以下は、テキスト⁽⁵⁾をもとに行った授業内容についてまとめたものである。

乳児期とは、1 歳から 1 歳半ごろまでの時期を指す。乳児は泣く・笑う・見つめるなど、自らのできる方法で積極的に発信すると同時に周囲の環境から多くのことを学ぶ。そのため、子どもの周りには、子どもが働きかけることのできる豊かな刺激や、子どもの働きかけに応答する存在が必要である。保育者はそのような環境を整え、自らがその環境の一部となり、子どもの発信を受け止め、応じる重要な役割を担う。「求めれば与えられる」という、子どもの発信とそれを受け止める大人とのやり取りの中で、子どもは基本的信頼感を獲得していく。また、基本的信頼感を育む前段階として、愛着がある。これは、子どもの発信に対して適切に応答する身近な大人との間に築かれる情緒的な絆のことである。

発達段階ごとの特徴については、初めに 1 学年後期の「保育の心理学」で学習する。その後 2 学年前期の「教育心理学」「子ども家庭支援の心理学」でさらに学ぶ。また、同年後期の「発達心理学」でも学ぶ。心理学領域科目において、発達段階の特徴は講座における学びの基盤と言える。学生は繰り返し学ぶ中で習得した知識・技能をもとに、演習や実習を通して思考を深めていく。

本講義で学んだ乳児の特徴をどう考えるかを学生に尋ねたところ、「乳児期の適切な愛着形成が、基本的信頼感の獲得につながることを知り、未満児保育に携わる保育者は、保育環境を整えるだけでなく、保育者自身が環境の一部となり、子どもの発信を受け止め応じる必要があることが分かった」と答えた。「この内容は既に知っている」で終わるのではなく、今後実習に行った時に、どのような対応ができるだろうと思考していることが分かる。

2017 年に改訂された保育所保育指針⁽⁶⁾では、乳幼児保育に関する記述が増えている。また、繰り返し「応答的」「受動的」という文言が用いられている。ここからは、特に乳児期に基本的信頼感の感覚を育むことを意識することの重要性が分かる。この内容についても授業の中で押さえると、「そう言えば、確かに実習先の先生方は、常に応答的に未満児に接していた。そういうことか」と反応した学生があった。

2. 幼児期の発達とその特徴

以下は、テキスト⁽⁷⁾をもとに行った授業内容についてまとめたものである。

幼児期とは、1歳または1歳半頃から小学校就学前の6歳ごろをいう。幼児期は、言葉話し始め、自らの思いを言葉で表そうとしていく時期である。最初は一語文から、2歳にかけて二語文が出現する。そして、物の名前を尋ねることで物の名前等を学習し、語彙が急速に増加していく。2歳の終わり頃には、多語文や複雑な文章を用いることができるようになり、自分の思いを言葉にして大人に伝えることが可能になってくる。3歳から4歳にかけては複雑な会話が可能になり、日常生活における言葉でのやり取りがスムーズにできるようになる。3歳を過ぎると、自己主張の気持ちを周囲の大人に受け止めてもらう経験を通して、また、他児への自己主張でぶつかり合った際にも大人に気持ちを認めてもらうことで、子どもは社会の中で通じる自己主張の方法を養っていく。乳児期前半において獲得し始めた基本的生活習慣は、幼児期後期に確実に身に付き、5歳児の段階では多くのことが自分でできるようになる。

幼児期の特徴についても、どう考えるかを学生に尋ねたところ、「幼児期も乳児期と同じように、日々の生活を通してどんどん成長していくことが分かった。周りにいる大人のかかわり方が、子どもの成長や発達に大きな影響を与えているため、子ども一人一人に適した支援ができる保育者になりたいと思う」という反応があった。繰り返し学習してきた知識・技能をもとに、将来の保育者としてのあり方について思考している姿である。また「実習時には気付かなかったことや、良く理解できなかったことについて、大学に戻って授業を受ける中で、保育実践の根底にあった考え方を理解することができました」と、授業後に感想を述べてくれた学生もあった。これらのことから、大学で保育の基礎を学び、実習先で保育実践を経験し、大学に戻りさらなる学びを継続することで、知識・技能の上に学生の思考が加えられた、実践的な学びとなっていくとすることができる。

Ⅱ. 子どもに対するかかわりと共感的理解のあり方

【「子どもの理解と援助」名古屋経営短期大学子ども学科2学年23名を対象に、2022年5月10日に実施】

1. 受容や共感的理解を表現するための方法

相手に共感する場合には、感じる大切である。しかし、様々なことを感じていてもそれをうまく表現できなければ、感じたことが相手に伝わらず、共感していることにならない。そのため、共感的理解をしたことを、豊かに表現する技術を身につけることが大切になる。

以下は、テキスト⁽⁸⁾をもとに説明した「共感的理解を表現する6つの方法」についてまとめたものである。

共感的理解を表現する6つの方法

A相手の調子に合わせる

姿勢や動作、話し方（声の調子、声量、速度など）を、できる限り相手に合わせる。

B相槌を打つ

話のタイミングに合わせて「うんうん」「はい」など短い言葉を挟んだり、首を縦に振ったりするなど、相手の調子に合わせた相槌を打つ。

C視線を合わせる

相手に視線を合わせることは、相手にプラスのメッセージを伝える。ただし、合わせすぎは逆に相手に威圧感や緊張感を与えるので、その加減が大切になる。

D言語内容の伝えなおし

相手の話した言葉をそのまま、または表現を変えたり内容を要約したりして相手に伝え返すこと。日常の会話ではあまり用いられないが、悩みの相談の場面や小さな子どもとのやり取りではよく使われる。

E感情の反射

相手の言動から受け止められた気持ちや感情を言葉で表現し、相手に伝え返すもので、最も共感してもらえたという感覚が生じる。相手の気持ちを推測して、感情を言語化してあげることで、話している人はあやふやだった自分の感情に気付くと共に、共感してもらえたという感覚を得ることができる。

F効果的な質問

話の聴き手側がうまく理解できなかったことを質問として話し手に投げかけることで、話の内容がより明らかになり、より共感的理解ができる。

2. 演習「話し手に共感的理解を示す練習をしよう（傾聴）」

続いて、テキスト⁽⁹⁾をもとに説明した演習の課題と手順を示す。

演習の課題

- ・他者と対話をする時に、共感的理解の表現技能を意識しながら相手の話を聴くことで、共感的理解を示すトレーニングをする。その際には、ひとりよがりにならないよう、自身の話の聴き方を、自己評価すると共に他者に評価してもらう。他者からのフィードバックも得ながら自己理解を深める。

演習の手順

- ① グループの中で、話し役 1 人、聴き役 1 人、観察役 1 人を決める。
- ② 話し役は 5 分間話をする。テーマ「私にとって大切なもの」「私の夢」「私が関心を持っていること」「最近会った考えさせられたこと」の中から 1 つ選んで話す。
- ③ 聴き役は話し役の語りを共感的に聴く。観察役はやり取りの様子を観察し、ワークシートに記録する。
- ④ 役割を交代し、全員がすべての役割を経験する。
- ⑤ 全員がすべての役割を終えたら、共感的理解を示すためにどのようなことが有効であったかをグループ内で話し合う。

学生の感想をもとに傾聴について考察する。

「今日は共感的理解を示す練習として傾聴の演習をした。話し手・聴き手・観察役を交代して行っていたが、共感的理解を表現する 6 つの方法の中で、私ができたのは前半の A B C のみ。D E F については、ほとんどできなかった。ただ、グループの中で、何人かは D E F を果敢に行っていた。すごいと思った。今日の演習は、人の話に共感的理解を示しながら聴く力があるかということだ。この共感的理解は、友人、後輩、家族、保育園の園児、園児の保護者と良いつながりを作っていくのではないだろうか。今日の演習は保育者としてとても大切なスキルであることを痛感した。日頃の大学生活の中で、傾聴の力をもっと高めていきたいと思った。」

傾聴の大切さを知っていても実際に行うことは容易ではない。筆者も学生時代に傾聴の演習を行った時のことを覚えているが、いろいろ気を付けようと思うとより混乱してしまう。本講義は、スキルの定着までは求めている。演習を通して傾聴の大切さについて体感することができれば、日常生活の中で傾聴の経験を増やし、スキルを高めていこうと意欲的に学び続けることができるであろう。

3. 保育における共感的理解

以下は、テキスト⁽¹⁰⁾をもとに行った解説内容についてまとめたものである。

保育所保育指針⁽¹¹⁾第 1 章総則 2 養護に関する基本的事項 (2) 養護にかかわるねらい及び内容イ情緒の安定 (イ) 内容の中に、「②一人一人の子どもの気持ちを受容し、共感しながら、子どもとの継続的な信頼関係を築いていく」という記述がある。

保育者が子どもの気持ちを受け止めながら、適切に応答していくことは保育の基本である。

こうしたなかかわりが継続的に行われることを通して、子どもの人に対する信頼感は育まれていく。子どもは深い信頼関係のもと、自分の気持ちに共感し、応えてくれる人がいることで、自分の気持ちを確認し、安定してその気持ちを表現し行動することができるようになる。つまり、保育者が子どもの気持ちを受容し、共感することで、子どもとの間に継続的な信頼関係を築くことができ、それが子どもの情緒の安定につながる。

演習後、この解説をしたところ「今日の演習はやってみてとても難しかった。演習前は、友達の話をしっとり聞いて何になるのだろうと思っていたが、演習後に先生から保育における共感的理解についての説明があり、私は傾聴の大切さについて気付くことができた。『子ども家庭支援の心理学』で学んだ乳児期と幼児期の特徴を知った上で、保育者は子どもの気持ちに共感し受容することができる。今日の演習はこのようにつながっていることが分かった」という感想を得た。この解説内容は、4月20日の「乳幼児期の発達とその特徴」の学習内容と重なる部分が多い。本学生はこのことから、講義を通して知った知識・技能をもとに、演習で共感的理解の実践をするという関連性に気付いた。このように、継続した学びが科目内だけで完結するのではなく、科目の枠組みを越えて保育の専門性を高める学びにできると、大学での学びがさらに実践的なものになるだろうと考える。

Ⅲ. 科目の関連による実践的な学びについて

【「子どもの理解と援助」名古屋経営短期大学子ども学科2学年26名を対象に、2022年8月9日に実施】

本章では、学生の省察をもとに、科目の関連による実践的な学びについて検討する。

1. 応答的ななかかわりの実際を見て、共感的理解について思考を深める

「私は実習中、保育者が『これをされて嫌だったんだね』『嬉しかったんだね』と、子どもの気持ちに焦点を当てた応答的ななかかわりをして寄り添っている場面を多く見た。演習では、話し手・聴き手・観察役を体験することで、効果的な質問や視線、そして相槌の頻度などの難しさを知ると同時に、聴き手の反応がその後の展開を大きく変えていく様子を目の当たりにした。『もっと話したい』と思うか、『もういい』と心を閉ざすかは、聴き手の選んだ言動一つで変わってしまうのだ。子どもは様々な個性をもつ。そのため、一人一人の様子をよく見てその姿の背景にある思いや心情を汲み取ることで、子どもが心身共に健やかに成長していく支援をすることが可能になるのだと感じた。」（下線は筆者による）

本学生は既習の応答的ななかかわりについて、実習先の保育者による応答的ななかかわりの実

際を見た。傾聴の演習で、聴き手が挟んだ一言でその後の展開が変わっていくことを見る経験を通して、聴き手の思考ではなく、話し手の思考を重視することで傾聴がうまくいくことに気付いている。そして、応答的なかわりの根底には共感的理解があることを実習先での保育者の姿から再認識し、自分も子どもの思いや心情を汲み取ることができる保育者になりたいと意欲を高めている。

2. 演習で行った傾聴を生かして、実習先の子どもたちとかかわる

「私は子どもに慕われる保育者になりたいと思っている。演習では傾聴の難しさを体験したが、だからこそ子どもが困っているときに話しやすい環境をつくるのが大切であると理解していた。しかし実際の実習では、子どもの話を聴いている途中で別の子も話し始め、私は焦ってしまった。『順番に聴くから待っててね』と言うと、その子はその場からいなくなってしまった。家で保育記録を書きながら、この子は会話に入りたかっただけなのではないかと気付いた。『〇〇君も電車に乗ったことあるんだね…』と、声を掛ければ 3 人での会話が成り立ったかもしれないと反省した。保育の現場では、日常における会話の中で信頼関係が築かれるため、子どもの話をよく聴くと共に、言動の奥にある子どもの気持ちに気付ける保育者になりたいと考えた。」（下線は筆者による）

本学生は、保育職への強い憧れを持っている。そのため、実習での失敗に挫けることなくより良い保育のあり方について自分自身で思考している。保育や教育には「このような場合にはこうすれば絶対に大丈夫」という「絶対」は存在しない。同じ言葉をかけても、子どもが違えば結果が全く変わってくることもよくある。本学生の「順番に聴くから待っててね」という応答は本来ならば模範的な対応であろう。それが通用しなかった経験から、一人一人を大切にしたい保育について深く考察している姿に、本学生の持つ力強さを感じた。

「実習の初め頃、あまり話をしてくれなかった子がいた。その子の話を最後まで聴くことを意識してかわり続けた結果、私に話をたくさんしてくれるようになった。また、実習中にけんかが起きた時、担任の先生は子どもと 1 対 1 で静かな場所で話をしていた。子どもの気持ちを否定せず最後まで聴くことで、子どもの気持ちは落ち着き、自分で自分の良くなかった言動を振り返った。私は、先生の言葉で子どもが変わっていく様子にすごく驚いた。自分の気持ちを受け止めてくれる人がいることで、子どもは安心して自己を発揮することができることを目にして、傾聴の大切さを実習中に痛感した。」（下線は筆者による）

本省察からは、子どもの発信を受け止め、応じるという受動的な保育者の様子を実際に見ることで、傾聴やその根底にある共感的理解について実感を伴う理解をしたことが伝わってくる。また、本学生自身が傾聴を大事にして子どもにかかわり続けた結果、信頼関係を築く

ことができた喜びについても記している。人と人が信頼関係を築くまでには、言葉や行動による一定時間におけるかかわりが必要になる。短い期間の中で、目標を立てて努力し信頼関係を築くことができたことは評価できる。

実習は授業だけでは学べないことを体験によって学ぶことができるとても貴重な機会である。一方で、実習によって力を伸ばせるかどうかは、大学での日頃の学びをどれだけ身に付けているかにも左右される。そう考えると、講義と実習をつなぐ演習科目の果たす役割の大きさを痛感する。

「子どもは自分の知っている言葉や文章を使って自分の言いたいことを一生懸命伝えてくれる。子どもが話しやすくなる配慮や援助をすることは保育者の大切な役割だと私は思った。実習では、話しかけられたら子どもと視線を合わせて話を聴くことや、話しかけられた内容から、その子に適した質問を投げかけることができた。演習の体験を実習に生かすことができ良かったと思っている。このかかわりによって、短い実習期間の中で子どもとの関係を深めることができた。また、この傾聴については、子どもだけでなく保護者との信頼関係を築くためにも大切だと思った。」（下線は筆者による）

本省察からは、演習で行った傾聴を実習先の保育現場での共感的理解に生かし、信頼関係を築こうと意欲的に子どもたちとかかわった本学生の意気込みが感じられる。演習で行った「共感的理解を表現する6つの内容」のうち、「A相手の調子に合わせる」「B相槌を打つ」「C視線を合わせる」だけでなく「F効果的な質問」も実践できたことが分かる。また、本学生は最後に傾聴による共感的理解は、保護者との信頼関係を築いていく上でも大切ではないかと思考している。

保育所保育指針⁽¹²⁾第4章子育て支援2保育所を利用している保護者に対する子育て支援(1)保護者との相互理解アに「日常の保育に関連した様々な機会を活用し子どもの日々の様子の伝達や収集、保育所保育の意図の説明などを通じて、保護者との相互理解を図るよう努めること」とある。核家族化やライフスタイルの変化に伴い、子どもの在園時間が長くなっている。また、様々な家庭状況にある保護者の利用増加に伴い、保護者との情報共有はますます重要となる。子どもの健やかな成長のために、より積極的に保育者と保護者が連携しながら適切に対応していく必要があるだろう。保育者と保護者が連携するためには、その根底に信頼関係が築かれていなければならない。本学生が講義・演習・実習を繰り返す中で、子ども一人一人に応じた保育を進めるためには、保護者との連携も欠かせないことについて気付いていることは評価できる。

おわりに

本稿では、科目の関連による実践的な学びについて「子どもに対するかかわりと共感的理解のあり方」の演習をもとに検討してきた。以下に本研究を通して明らかになった成果について示す。

1 つ目は、「乳幼児の発達とその特徴」について様々な科目で学んだ知識・技能は、演習や実習を通して実践的な力につながっていくということである。また、実習後さらに大学で学習する中で、学習内容と実習内容がつながり、より深い思考を生んでいる。共感的理解や傾聴について内容を知っているだけではなく、保育現場で実践できる力にまで高めるためには、科目の関連がとても大切であると言える。

2 つ目は、子どものより良い成長のためには共感的理解をもとにした温かいかわりが欠かせないことについて思考を深められたことである。保育実践に熱心になるあまり「私がこんなに頑張っているのに、この子はどうして〇〇なのだろう」と授けた分の見返りを求めるような思考に陥ることがある。しかし、子どもの言動の奥にある思いや心情を汲み取ることができる保育者になりたいと意欲を高める姿が見られたように、講義・演習・実習のそれぞれの経験が、学生の保育者になりたいという意欲の強化につながっていると言える。

最後に、授業において今後さらに工夫していきたいことについて示す。学生は講義・演習・実習を通して力を付けていく。そして、思考を深め、保育者としての実践力を高めていく。一方で、自分一人で思考を深め、学び続けることに困難さを抱える学生も見られる。そこで、授業内では問い返しをすることで、学生が思考したり判断したりする機会を増やしていきたい。特に、本講義の学習内容は以前に学んだことがある内容か、または初めて学ぶ内容かについて問い返すことで、共通理解をすることができる。既習事項であった場合は、どの科目でいつ頃学習したかを確かめることで、学習内容の関連性がより高まる。

また、本講義で学んだ内容についてワークシートに自分の考えを記述できるようにする。この繰り返しにより、新しく得た知識・技能についても自分なりの見方や考え方で思考が深められるようにしていきたい。優れた考察については、次回の授業の始めにその内容を紹介し価値付けることで、他学生の考察への意欲も高めたい。また、学生の考えを紹介した後は、それについてどう思うかをペアで交流することもできる。今後の課題としては、思考を深める学習活動をさらに工夫することを通して、保育職への強い意欲と高い専門性を持つ保育者の養成に尽力していきたいと考えている。

【注】

- (1)日隈美代子・中澤幸子・柳生明子「保育士養成課程における心理学領域科目が担うもの一科目「保育の心理学」「子ども家庭支援の心理学」「子どもの理解と援助」から考える一」、『環境と経営第 26 巻第 2 号』2020 年、13-24 頁。
- (2)日隈美代子・中澤幸子・柳生明子「子育て支援・子ども家庭支援の専門性を高める学び：科目「子ども家庭支援論」「子ども家庭支援の心理学」「子育て支援」から考える」、『環境と経営第 26 巻第 1 号』2020 年、65-76 頁。
- (3)藤井裕子「卒業研究作成の試みー「子ども支援の心理学」の講義・演習を通してー」、『神戸教育短期大学教育実践研究紀要第 4 号』2022 年。
- (4)高橋真由美・川田学「学生の子どもの理解に関する学びに影響を与える要因ー幼稚園教育実習の経験との関連からー」、『北海道大学 子ども発達臨床研究 第 15 号』2021 年、11-30 頁。
- (5)角張慶子「乳児期の発達とその特徴」1-4 頁、本郷一夫・神谷哲司『子ども家庭支援の心理学』建帛社、2019 年。
- (6)厚生労働省『保育所保育指針』2017 年 3 月、13-15 頁。
- (7)角張慶子「幼児期の発達とその特徴」前掲書、4-8 頁。
- (8)森俊之「受容や共感的理解を表現するための方法」15-17 頁、清水益治・森俊之『子どもの理解と援助』中央法規、2019 年。
- (9)森俊之「話し手に共感的理解を示す練習をしよう」前掲書、18-20 頁。
- (10)森俊之「保育における共感的理解」前掲書、17 頁。
- (11)厚生労働省『保育所保育指針』2017 年 3 月、6-7 頁。
- (12)厚生労働省『保育所保育指針』2017 年 3 月、36-37 頁。